「歴史総合」の授業はどのように取り組まれてきたのか —自らの実践も踏まえて—

関西大学中等部・高等部教諭
矢部 正明

1. はじめに

高等学校の新課程が始まって3年目に入った。本稿では、高校教員が「歴史総合」をどのように見ているのか、どのように取り組んできたのかについて述べていく。本稿の執筆の動機として、筆者が参加してきた二つの研究会の活動が深く関わるので、最初に紹介しておきたい。

一つは、2005年に発足した大阪大学歴史教育研究会である。歴史学・歴史教育をめぐる「高大連携」を目的とし、歴史教育の刷新のために大学教員・高校教員・大学院生が議論する月例会形式で開催され、今も続いている。筆者も発足初期から参加して、歴史学の成果を取り入れた高校世界史の授業案や実践の報告をたびたび行ってきた。

もう一つは高大連携歴史教育研究会(以下、高大研と略する)である。2015年、高大の連携により歴史教育の改善をめざす全国組織の研究会として発足した。筆者もその呼びかけ人の末に名を連ね、当初より研究活動に参加してきた。

この研究会では、2018年に告示された『高等学校学習指導要領 地理歴史編』において新設された歴史科目を高大の歴史教育の架け橋と考え、歴史的思考力・判断力・表現力をどのように育むか議論を重ねてきた。中でも「歴史総合」については、高校教育として初めて世界史と日本史を融合させた歴史教育の実施が求められたことから、新しい歴史教育のあり方への期待が寄せられた一方で、高校現場では不安や戸惑いの声も聞こえてきた。そこで高大研では大学の歴史学・教育学の研究者、高校教員らが目標の実現のため、教授法の研究、「歴史的概念」を理解させる授業づくりの提案など、この科目によって大学の教養教育にもつながる新しい歴史教育を構築すべく活動してきたのである。

本稿では、これらの研究会の活動と全国の高校教員との交流を通じて知り得たことや、筆者の授業実施を踏まえ、実施3年目に入った「歴史総合」の成果や課題について述べていきたい。さらに2025年から始まる、新課程による大学入試の課題と展望につ

いても言及したい。さらには「歴史総合」から、筆者の専門とする世界史科目の「世界史探究」へどのようにつなぐことが必要であるか私見を述べたい。

2. 「歴史総合」の実施から2年、高校教員はどのように実践してきたのか

高大研が会員の高校教員に向けて今年3月に実施したアンケート「歴史総合の授業についての実態調査」(171名が回答)について、7月28日の高大研第10回大会(@静岡大学)において分析結果の報告がなされた。このアンケートは、これまでの2年間に「歴史総合」を担当した経験を持つ会員を対象に実施されたので、今年度初めて「歴史総合」の授業を担当した筆者は対象者から外れている。研究会内部の調査であり、今後結果を広く公表するかどうか、公表するとしたらどのような形で行うのかはこれから検討される。よって、現時点では結果内容やどのような分析がなされたのかについては本稿で紹介することはできない。だが、高大研のアンケートに回答した高校教員からは、新課程の歴史科目へ「前向きに」「高い意識を持ち」、取り組んでいる傾向があるとわかった。これは、同僚や筆者が知り合った全国の教員から聞いたこと、そして今年度に「歴史総合」の授業担当者となった筆者が現在感じている手応えや困難・課題と共通することがとても多い¹⁾。

(1) 手ごたえ・成果があったこと

一つ目は「対話的授業への取り組み」について、筆者を含む多くの教員が取り組んでいると思われることである。具体的には、「教師の設定による問いの考察」、その問いについて「生徒のディスカッションを実施」などの取り組みである。これは従来の歴史授業のあり方を転換し、対話的な手法を取り入れ、思考力を重視した授業への転換を図った、あるいは図ろうとしていることを示す。

二つ目は、「資料読解の実施」という活動についてである。これも筆者を含め、話を聞いたほとんどの教員が実施している。史・資料の読解により歴史事象

の比較や因果関係を理解する活動により、「深い学び」の実現に向けてよく取り組まれているのではないか。

(2) あまり実現ができていないこと

「生徒の設定による問いの考察」「生徒が調べたことの発表」という活動は、生徒の主体的活動として学習指導要領において要求されていることである。しかし、筆者も教員の発問による対話、史・資料の読解に時間を要することから現時点で実施できていない。

また、同僚や他校の教員にも聞いたが、上記の活動については十分に組み込まなかったという声をよく聞いた。特に「問いを表現する活動」については、新課程の歴史科目における、生徒の主体的で深い学びのための「肝」というべきものであるが、時間的制約から組み込んでいないだけでなく、実際にどのように生徒に取り組ませるか戸惑う教員が多いと考えられる。

(3) 「歴史総合が終わらない問題」

筆者の勤務校では、高等部1年次に「歴史総合」と「地理総合」をそれぞれ2単位(週あたり50分×2時間)履修させている。過去2年間の「歴史総合」では、問いの考察や生徒との対話的活動を入れて、「歴史総合」の基本理念に基づいて授業を展開した結果、授業進度を確保するのに苦労したようだ。

他校の複数の教員に「歴史総合」の進度を尋ねたところ、同じような状況であることを多く聞いた。

この「歴史総合が終わらない問題」は、全国的に少なからずの高校で起こっていることであると思われる。共通テストを歴史科目で受験する場合、日本史・世界史の探究科目や地理総合・公共との組み合わせにおいて、「歴史総合」の全単元を終わりきらないというのは大きな問題である。

そこで本校では、日本史・世界史の探究科目の担当者が補習を行い、カバーする対策が取られている。同様の対策を取らざるを得ない高校が多いことも想像に難くない。

そもそも、全単元を終えられないということは、「歴史総合」という科目の理念に悖ることになってしまう。歴史の探究科目が必修から外れているので、歴史を通時的・体系的に学ぶ最後の機会になる生徒も多くいるだろうし、現代史が終わらぬままであれば、生徒自らに、歴史的に物事を考えさせること、歴史的なものの見方を持たせること、そして現

代的課題を考察させる活動に至らない。さらなる内容の精選を図る必要に迫られている。

一方で、「歴史総合」を3単位で実施している高校の教員の話を見ると、生徒の主体的活動や問いを表現させる活動に至るまで、しっかりと取り組めたとのことであった。筆者自身の感覚においてももう1単位あれば生徒の主体的な活動の時間を持たせられると考える。標準単位数の増加を望む高校教員の声が高まることも予想される。

上に述べた状況の中で、大学入試、とりわけ共通テストを受験する生徒のためにも「歴史総合」の全単元を終えてほしいという学年団からの強い要望に応え、全ての単元を終える方策を見出すこと、そして科目の理念に適った授業を展開することが筆者に課された重い使命となったのである。

3. 「歴史総合」の授業を初めて担当して

筆者は、新課程における高校の地歴科「歴史総合」導入から3年目にして初めて授業を担当することになった。本稿では、4月から7月現在まで授業に取り組んできた中で特に重点をおいたこと、授業の進め方において工夫してきたこと、そして実際に授業を担当したことにより見えてきたことについて述べたい。筆者は「歴史総合」の授業で、7月現在において、「近代化と私たち」のうちアヘン戦争を終え、明治維新にさしかかったところである。

(1) 「歴史総合」をどのように始めたか

最初の授業において、生徒たちには「歴史総合」は「歴史的なものの見方、考え方」を学ぶ科目であること、覚えるのではなく理解した上で歴史的に物事を考え現代を見つめる科目であることを伝えた。

その上で最初の問いとして、大項目の全てにある「私たち」とはだれで、私たち以外はだれなのか、を問うた。生徒たちはそれぞれに自分の言葉で考えたことを答えてくれた。その中で「現代に生きる人々が私たちで、歴史上に現れた人々が私たち以外である。だから現代を生きる私たちが主となり歴史を見つめることを言っているのではないか」という生徒の回答に大いに首肯したのである。こういった歴史の見方・考え方を大切に一緒に授業を進め、共に学んでいこうと述べて授業は始まった。

次に説明したのは大項目にある「近代化」「国際秩序の変化や大衆化」「グローバル化」についてである。

これらは時代を追って現れる主な局面をとらえた概念であるが、各時代の中にも、技術革新や政治の刷新により近代化を進める局面、大衆によって歴史が動かされる局面、国際秩序が変化してその影響を受ける局面、グローバル化により歴史が大きな影響を受ける局面を見出すことができる。これらの局面が現れた時、歴史の転換点になるので、授業の中で見つけていこう、と話した。そして授業プリントにも、これらの局面が現れた時にあえて近代化・大衆化・グローバル化という言葉を用いて注目させる工夫を行っている。

(2) 「歴史総合」の全単元を終えるための工夫—中学校の歴史の学習を踏まえる

実は、中学校の「社会(歴史的分野)」と高校の「歴史総合」の教科書には、本文や注の記述に共通点が多い。さらに、中学校の「社会(歴史的分野)」の教科書には、高校の歴史科目の教科書よりも踏み込んで新しい視点で記述されている部分がある。

そこで、以下のように知識・理解を担保しながら簡略化を試みた。近世の大航海時代や、宗教改革・ルネサンスから市民革命といった世界史上の画期となった歴史事象、日本の江戸時代においては、中学校の「社会(歴史的分野)」と高校の「歴史総合」で重複する単元や事象について、授業プリントに「復習」としてアウトラインを盛り込む一方で、講義については大胆に簡略化した。

近代に入ってから日本の歴史においては、授業プリントにて、小単元に見出しで「中学・歴史の学び」+ a と書いて、中学校の歴史の授業で学んだ人名や出来事の名称などの用語を穴埋め式にはせず、先に述べたように、近代化・大衆化・グローバル化の視点で歴史の転換点やその経過についてまとめさせたり考察したことを書かせたりする工夫をした。「近代化」の授業においては、授業プリントに詳細な解説を多く入れたにもかかわらず、講義内容の精選による時間の節約が実現できて、問いの考察への時間を取ることがある程度できたと思っている。

しかし、筆者の授業は、これから大項目B「近代化と私たち」の帝国主義の時代と、「国際秩序の変化や大衆化と私たち」の時代という、様々な局面が各地で起こる時代にさしかかる。これまでの授業以上に知識担保のための説明に多くの時間を要することになるし、生徒の主体的活動にも時間を要するので、さらなる工夫を考えねばならないと考えている。

(3) 深い学びの実現のための工夫

従来の高校の歴史系科目においては、用語が多くてその暗記に終始し深い学びにつながらないこと、さらには歴史用語の過積載が高校生の歴史離れを招いたという言説は多く語られてきたが、この問題については「歴史総合」の教科書において、ある程度克服されたといえよう。むしろ「歴史総合」では、日本史と世界史の両方の内容を融合的に扱う上で簡略化された教科書の記述により、かえって補足説明が多く必要になり、時間を取られてしまうことも指摘されている。これを克服することに多くの教員が苦勞しているのである。

授業を進めていて気づいたことは、多くの生徒たちが教科書を読んでも理解することが難しいと感じていることであった。特に、世界史的な内容では、カタカナで表記された初めて見る地名・人名・出来事などの用語を追うのに精一杯で、ほとんど頭に入っていないという生徒の訴えを聞いた。教科書本文の叙述は多くの歴史事象を含み、概念的な用語が多用され、知識の不足した中で理解させるのは難しい。この理解の先に、問いを考察したり、自分なりの考えを表現したりする活動が成立するのである。

そこで、筆者はあえて「歴史総合」の教科書に載せられた歴史的な用語については、できる限り簡潔に解説を加え、概念的な用語については事例を挙げて、平易な言葉に開いて丁寧な解説を授業プリントの中に盛り込んだ。授業中にこれを読ませる時間を設けることにより、深い学びへつながる知識の担保とした。また、歴史的経過が簡略化され、流れがわかりにくいところは、教科書に記載のない歴史事実を時系列で記述して経過がわかるような授業プリントにした。つまり、授業プリントの用語等の説明を詳しくすることで、かえって時間の節約になり生徒の活動時間の確保ができるのである。

また、日本の歴史部分については、世界の中の日本という視点を持たせるようにしている。比較や関係性についての問いを用意して、日本の歴史事象が世界の中ではどのような位置付けとなるのか、世界から日本はどのように見えていたのかについて考えさせることにしている。

さらに、「近代化」という言葉の持つ西洋中心的な意味を相対化することにも努めた。教科書にあったボメラントの「大分岐論」における、19世紀に欧米のアジアへの相対的優位が始まったという歴史の見方は、「近代化=欧米の模倣」、「欧米による植民

地化に飲まれるアジア」という、ややもすれば、西洋中心の歴史の見方だけに陥る。そこで、速水融の「勤勉革命論」を取り上げ、イギリスなどの「産業革命」における資源集約型の農業革命と比較・考察させた。

さらにこれからの授業では、19世紀後半のアジアの労働集約型の工業化やアジア間貿易を取り上げ、欧米の発展とは違う商工業の発展過程であったことを理解させていく。

4. 大学入試における「歴史総合」の課題

新課程の内容に基づき実施される大学入試が2025年から始まる。共通テストの歴史科目については「歴史総合」単独で実施されず、「歴史総合、日本史探究」「歴史総合、世界史探究」、または「地理総合／歴史総合／公共」（歴史総合を選択した場合）として出題されることになる。すでに大学入試センターは「試作問題」を公表しており、具体的な出題・配点が判明している。公民科目や地理科目の選択に比べ、歴史科目を選択した場合、「歴史総合」と探究科目を合わせた教科書内容の多さから受験生にとり負担感が大きいという教員の声をよく聞く。

一方で、私立大学の一般入試における歴史科目の出題において「歴史総合」の扱いが実に様々だ。各私立大学が発表している入試概要によると、「歴史総合」＋探究科目、「歴史総合」の日本史部分＋「日本史探究」と「歴史総合」の世界史部分＋「世界史探究」、探究科目のみで実施する大学に分かれる。「歴史総合」を履修していない既卒生への配慮として経過措置の実施を入試概要に記載している大学もある。いったん発表した入試概要の変更を行った大学もある。私立大学の入試における「歴史総合」の扱いと入試問題の内容は実施されないとわからないのが現状だ。新課程による共通テストの実施とともに今後の動向を注視していく必要がある。今、教員が懸念していることは、行ってきた授業と大学入試の出題に乖離があるのではないかということなのである。

5. 最後に代えて「歴史総合」から「世界史探究」へ

「歴史総合」は世界と日本の近現代史を融合的に扱う科目であるが、それをさらに発展的に深い学びとして歴史の探究活動を重視するのが「世界史探究」と「日本史探究」である。しかし、探究科目の近現代部分では、「歴史総合」との重複をどのように差

別化して授業を作っていくか。単に内容を詳しく細かいところまで学習させることに終始してしまうのであれば、旧課程の「世界史B」「日本史B」の時と同様に用語で敷き詰めた暗記が目的化してしまう。

筆者も「世界史探究」の授業を担当し、用語や内容の精選をしながら探究の時間を確保すべく、授業づくりを進めている。古代から現代の中で比較的長い時間と広い地域を対象としたグローバル・ヒストリー研究の鍵となる「比較」と「関係性」という概念をもとに、探究させる問いを立てている。「比較」させたり、「関係性」を問うたりするには、適切な史・資料が必要となる。教科書では、探究活動の材料として図版資料が豊富に掲載され、翻訳された文献史料も旧課程の世界史の教科書より多く掲載されている。しかし、もう少し深く探究させようとすると、教員がさらに史・資料を渉猟してくる必要があるが、これには大変な労力と時間を要する。

「歴史総合」については、学習参考書とは別に、歴史学者・高校教員らによって書かれた、豊富な史・資料を掲載した「歴史総合」のための書籍が近年多く出版されている。

一方で、「世界史探究」については、科目の目標に沿った史・資料を掲載した書籍はまだまだ少ないように感じる。歴史学研究会編『世界史史料』全12巻(岩波書店)は、高校教員にとり大変有用であるが、高校生の探究活動に使用するには、教員がかなりの時間をかけて「加工」しなければならない。高校生に持たせる副読本として、歴史事象や用語の平易な解説のあるコンパクトな史・資料集を待望するのは筆者だけではないと思う。

私たち高校の歴史教員は、新課程が始まってからの全国の教員の授業実践を道標として、授業実践を一つひとつ積み上げながら、歴史的な思考力を育み、「深い学び」へつなげるための試行錯誤を続けていくのである。

【注】

- (1)「歴史総合」について実践的に考察し、成果と課題を的確にまとめたものに以下の小川幸司の論考がある。合わせて読んでいただきたい。「動き始めた歴史教育改革の成果と課題—実践的考察」(『歴史評論』890号 2024年)「『歴史総合』は世界史と日本史を本当に総合できるのか」(山川歴史PRESS No. 21 2024年)